

地域の未来をつくる大学

金属加工などの産業が集まる新潟県・燕三条地域に開学した三条市立大学が地域の未来を担う人材づくりに奮闘している。アハメド・シャハリアル学長に寄稿してもらった。

三条市立大学は2021年4月、新潟県の燕三条地域に開学した。入学定員は80人。工学部技術・経営工学科のみの小さな大学だ。

育てるのは「イノベーター・ブテクノロジスト」。単に工学の知識を持つ技術者ではなく、社会や産業が抱える課題を発見し、技術で新たな価値を創造し社会に実装できる創造性豊かな技術者だ。企業の中核になる人材でもある。

イノベーションを目的にする学びの構造も変わる。知識を持つだけでなく、知識をつなぐことが重要だ。イノベーションの多くは異なる技術や学問、産業がネクサス（連関）をつくる境界領域から生まれる。

機械、機能性材料、電気電子など工学の諸分野を複合的に学び、マネジメントの知識も身につける教育体系を構築した。22週間にわたる企業での産学連携実習も導入した。

学生は現実のものづくりや事業活動、そこで働く人々と関わり、課題に向き合う。大学での学びと連携企業での経験を往復しながら知識を知性へ、さらに知恵へと変えていく教育プロセスである。

そもそも、三条市が大学をつくらなかったのは日本に大学が不足していたからでも、新潟県に大学がなかったからでもない。すでに国内にも県内にも多くの大学がある。

革新生む技術者育成



アハメド・シャハリアル

新潟県三条市立大学長

だが、燕三条の持続的発展に結びつく研究開発や価値創造は十分に生まれていない。地域に定着する若い世代も少なく、将来への不安も解消されていなかった。

開学前の調査でも地域から出てくるニーズの多くは「いま困っていること」への対応だった。地域には多くの優れた技術や経験があるのに、それを中長期のビジョンにつなげる機能が不足していた。

そこで市は公立大学をつくるという大きな決断をした。

出発点にあったのは「地域社会が抱える課題を解決し、未来をつくる若い人材を自らの地域で育てる」という考え方だ。実学系大学という新しい仕組みをつくることで人を育て、卓越した知を生み出し、企業や地域と結びつける。その循環によって地域の未来を確かなものにする。

地域を変えることが目的ではなく、未来へ継続していくために必要な変化を受け入れる。これが基本的な考え方だった。

その意味で本学は完成された大学のモデルを地域に持ち

学内・企業往復し学ぶ／来春定員拡大へ

学生はプロジェクト型学修と経験型学修を往復する（三条市立大の教育システム）

年次	プロジェクト型学修（PBL）	経験型学修（EBL）	学生に起こす変化
1年	前期 ・自己基盤、情報収集 ・論理的思考	燕三条リテラシー、企業訪問	地域とものづくりを知る
	後期 商品分析、チーム形成、ビジネスフレーム	—	製品・企業を考える視点を持つ
2年	前期 企業、業界、市場分析	—	企業をふかんして理解する
	後期 実現現場の問題分析	2週間×3社	ものづくりをふかんに経験する
3年	前期 設計、試作、PoC	—	問題を解決策へ変換する
	後期 —	16週間×1社	1つの現場に深く入り実体験から潜在的な課題を発見
4年	前期 市場調査→商品企画	—	・課題解決の糸口を見つける、社会実装 ・価値創造へつなげる

（注）PBLは学内、EBLは学外。PoCは概念実証

用の対象であるだけでなく、ともに学び、育て、未来をつくる存在と捉える企業が増えてきた。大学と企業の双方が変わることで地域が変わる兆しを感じている。

「ものづくり」という本学の軸は絶対にはずしてはならない。日本は知恵と技術でものをづくり、世界に提供することで豊かさを築いてきた。燕三条も同様だ。

人工知能（AI）やデジタル技術が急速に発展しても、この本質は変わらない。むしろ従来のものづくりにデジタルやAI、グリーン技術を掛け合わせ、新しい価値を生み出していくことが必要だ。

ものづくりの軸を守るためにこそ変わり続ける。その中心に大学があるべきなのだ。その際、小規模であることは本学ならではの大きな強みとなる。学生一人ひとりの顔が見え、教職員や企業のメンター、起業家など様々な立場の人が一人の学生に向き合う時間を十分に確保できる。

学生の個性や関心、成長段階を丁寧に捉えつつ挑戦を後押しできる。密度の高い関わりの中で学生の想像力や創造性を刺激し、可能性を引き出していく。

丁寧な自己否定
教育全体に必要

シャハリアル学長はバン・グーデシュ出身で専門は応用システム工学。沖縄科学技術大学院大学（OIST）で研究成果を商業化につなげるプログラムの開発・運営に携わった経験もあり、

技術移転を通じた大学の地域貢献の大切さ、難しさをともによく知る。大学自体をスタートアップと捉える視点は新鮮だ。日本の大学には設置から最初の卒業生を出すまでは教

していく。小規模校だからこそ実現できる教育の価値だ。AIの能力がどれほど高まってても「どんな未来をつくりたいか」を問い、その未来を選び取るのは人間だ。AI時代になればなるほど大学には知識を伝える場を超え、人間の想像力や創造性を育み、自ら未来を構想する力を養う役割が求められる。

大学は「丁寧な自己否定」が必要だ。これまでやってきたことの価値を認めつつ「この教育は本当に10年後も必要なのか」「社会から見て価値があるのか」と自らに問い続けるべきである。

入学定員を拡大していく中では学生募集も課題になる。本学で学んで「こんな人になりたい」という憧れを持った120人に来てほしい。

それには小学生のころから地域の大学に触れ、大学生や研究者、地域企業の技術者と出会い「自分もいつかこんなことをやってみたい」と思える体験をつくる必要がある。

「大学に行けば、こんなことができるかも」という小さな憧れがやがて学ぶ意欲になり、地域への誇りになり未来をつくる力になる。そうした変化を生むことが地方大学の重要な使命の一つだろう。

育課程などを変えられない縛りがあるが、人工知能（AI）をはじめ技術進歩の速度は上がっている。柔軟な見直しを可能にすることも検討すべきだろう。

これからは少なくなる若者の一人ひとりを伸ばしていかないと国が立ちゆかない。「丁寧な自己否定」は教育の全体に必要なだ。

（編集委員 中丸亮夫）